

エステル記 (Esther)

2,18 $\text{לְיָמֵינוּ} \rightarrow \sim \text{לְיָמֵינוּ}$ 。

ダニエル書 (Daniel)

2,31 $\text{לְיָמֵינוּ} \rightarrow \sim \text{לְיָמֵינוּ}$ 同B, K。5,11 $\text{לְיָמֵינוּ} \rightarrow \sim \text{לְיָמֵינוּ}$ 同B, K。6,24 אֲשֶׁר アクセントのマーパクがついている $\rightarrow \text{אֲשֶׁר}$ マーパクはなく, ギーメルにヒーレク。

エズラ書 (Esra)

5,2 ソーフパセクなし \rightarrow あり。

以上の分析からLの読みを再現するさいのSの基本的な問題点を挙げると次のようになる。

1. アпаратに関して

L自体に問題のある読みに対してSがどのように対処したかは次の2つのケースに分類される。1) SがLのそれらの読みを修正している場合。このようなケースの多くはアпаратによって読者の注意をうながしているが、申4,7. 22, 29. サム下2,5のように暗黙のうちに修正している事もある。2) SがLの問題のある読みを無修正でそのまま印刷再現している場合。そのほとんどはワイルによるマソラの脚注“Mm…contra textum” (大マソラはLの読みと逆らっている, 即ち, Lの読みは大マソラに即していない, の意), あるいはアпаратの sicL によって知り得るが, 詩144,15のように何らの言及もない場合もある。

又 sicL 自体も一貫性を有していない事は, 本誌12号の拙論で述べた通りである。尚“Mm…contra textum”に関する問題は本論文では触れなかったが, S全体ではかなりの数にのぼる。

2. 全体的見地からの方法論的問題点

これは要約すればまず, 1) 主要なベン・アシェル写本との精密な校合の欠如である。L本文の検証とS本文の校正のためにAを用いる事が出来なかった事はまことに残念なことである。その為KからSに単純に引き継がれた誤植が少なくない。

2) マソラや写本の伝統という視点からの取り扱いの弱さ, である。一見問題のあるLの読みに出会う時, それを常識的に簡単に処理せず, 背後にある複雑な写本伝統の相克を読み取る判断力とその為の作業過程の確立が望まれる。特筆すべきはアクセントで, 殊にメルカーとティプハー, ヤエティーブとマーパクの厳密な比較検討をすれば, 数多くの問題点が見出される事であろう。

II ヒッルーフィームとC, A, L

Lにはさらに, L本来の読みがL自体の中で既に修正されている個所が数多く見うけられ, 興味ある研究のテーマを提供している。サムエル・ベン・ヤコブ (あるいは他のマソラ学者) によるこれらの修正箇所は数百にのぼっている。そのほとんどはマソラ (大マソラ, 小マソラ, オクラ・ウエオクラ) による修正であり, 他はヒッルーフィームによる修正である。^⑤ 前者の問題は繊細かつ専門的な西方マソラ学者の正書法に関わっており, 後者は東方 (バビロニア学派) と西方 (ティベリア学派) の二大マソラ学派間の写本伝統の相違の問題に関わっている。今回は後者の問題の一部に触れ, 以下にC, A, Lに於て, ヒッルーフィームによって修正されている読みを列挙する。矢印の前の星印付の読みが本来のもの, 矢印後はマソラ学者による修正後の読み。修正後の読みが東方の本文伝承に属するものは東, 西方の伝承に属するものは西と記す。尚具体的な問題の所在とその分析は紙面の都合上割愛する。士師20,36 L $\text{לְעַל} \rightarrow \text{אֶל}$ 西。サム上15,6 A $\text{לְעַמִּי} \rightarrow \text{עַמּוֹ}$ 西。サム下6,23A, L $\text{לְיָדָךְ} \rightarrow \text{יָדְךָ}$ 西。13,32 A, L $\text{לְשִׁמְךָ} \rightarrow \text{שְׁמֶךָ}$ 西。イザ6,13 A, L $\text{לְעִשְׂרֵיךָ} \rightarrow \text{עֶשְׂרֵיךָ}$ 東。14,26 C $\text{לְהִינְעֶנְךָ} \rightarrow \text{הִנְעֶנְךָ}$ 東。27,6 A $\text{לְיַפְרָח} \rightarrow \text{יַפְרָח}$ 西。44,27 C

וְנִהְיֶה־תִּקְדָּם → וְנִהְיֶה־תִּקְדָּם 西。59,4A וְהוֹלִיד → וְהוֹלִיד 西。エレ5,17 C
 בָּטַח → בּוֹטַח 西。9,23A וּמִשְׁפָּט → מִשְׁפָּט 西。10,18 C
 וְהִצְרֹתִי → וְהִצְרֹתִי 西。17,4 A תִּיקָד → תִּיקָד 西。23,35 A
 אֵל → עַל 西。26,8A עַל → אֵל 西。26,24 A בְּנִי → בֶּן 西。29,7 A
 הַגְּלִיתִי → הַגְּלִיתִי 西。27,19 A עַל → אֵל 西。45,1 A בְּשָׁנָה → בְּשָׁנָה
 西。46,2 A אֵל → עַל 西。エゼ16,13 C שָׁשׁ → שָׁשׁ。27,6 A
 כְּתִיבִים → כְּתִיבִים 西。歴代下4,1 A הַנְּחֻשֶׁת → נְחֻשֶׁת 西。詩45,16 L
 בְּשִׁמְחֹת → בְּשִׁמְחֹת 西。ヨブ17,10A, L וּבְאֵן → וּבְאֵן 西。22,24 A
 וְיָשִׁית → וְיָשִׁית 西。箴23,29A מְדַבְּרִים → מְדַבְּרִים 25,24 A
 מְדַבְּרִים → מְדַבְּרִים 西。エス2,21 L אֲחַשְׁרֹשׁ → אֲחַשְׁרֹשׁ 西。ダニ3,28
 ל וְנִשְׁמְחֶהוּ → וְנִשְׁמְחֶהוּ 西。

以上の個所を以下の二項目に於て検討する。

1. Sとの関連に於て。Lの修正個所をSのアパルトに於て点検すると、士師20,36では“mlt Mss על”, サム下6,23では“mlt Mss K^{or} וְלָד cfGn. 11,30”, そして13,32には“mlt Mss K^{or} שִׁמְחָה”とそれぞれアパルトがあるが他の3ヶ所にはない。前3者に於てもLの本来の読み(L*)を提示し、それがヒッルーフィーム伝承によって修正されている事実は全く看過されている。第I項の要約2で述べた事がここでもそのまま言われ得る。

2. 本文伝承との関連において

総じて2つの事柄が注目される。1) 全体的に言ってLに比べて本文の修正箇所が圧倒的に少ないAに於て、ヒッルーフィームによる修正だけにはなはだ多いこと。2) 少数の例外を除いてはこれらの修正は読みの「西方化」をめざしている事、である。

歴史の長い流れの中でヒッルーフィームは権威ある伝承となりカイロ預言者写本を記したモーシェ・ベン・アシエルの時代にそして多分彼の名のもとにその権威の座を確立したように見える。ソロモン・ベン・ブァアの記したヘブル語本文を、ヒッルーフィーム伝承に即して精密に校正していた不世出のマソラ学者アaron・ベン・アシエルの姿をここに見る。Lの

ソーフエールかつナクダン、サムエル・ベン・ヤコブは労苦しつつその師の足跡を踏んでいる^⑧。

注

- ① 「BHS, その本文の性格と問題点—レニングラード写本(Codex Lenin-gradensis B19^a)とビブリアヘブライカ・シュトットガルテンシア(Biblia Hebraica Stuttgartensia)の諸問題への考察」(『福音主義神学』第12号(1981年)1-23頁)。尚, 2頁11行目の“ミシャエル・ベン・ウジエルなる人物の”の後に“リストを伝える, コンスタンチンノーブルのラビ・ヨセフの”を補足。誤植の訂正については13号95頁を参照。
- ② Biblia Hebraica Stuttgartensia, ed. K. Elliger et W. Rudolph, Textum Masoreticum curavit H. P. Rüger, Masoram Elavoravit G. E. Weil, Stuttgart 1968-1976.
- ③ 1977年版の一巻本のBHSで既に修正されている諸点も参考の為取り挙げるがこれらのケースでは(修正済)と記す。
- ④ The Aleppo Codex, provided with massoretic notes and pointed by AARON BEN ASCHER. ed. by M. H. Goshen Gottstein, Jerusalem 1976. (注⑬参照)
- ⑤ Biblia Rabbinica-A Reprint of the 1525 Venice Edition, edited by Jacob ben Hayim Ibn Adoniya. Introduction by Moshe Goshen-Gottstein, Jerusalem 1972. 略号Bは出版のスポンサー, ダニエル・ボンベルグに由来(かくeditio Bombergianaとも呼ばれる)。
- ⑥ Codex Cairo of the Bible. Introduction by D. S Lowinger. A limited facsimile edition of 160 copies, Jerusalem 1971.
- ⑦ The Damascus Pentateuch (Jewish National and University Library Jerusalem Heb. Quart, 5702), ed. by D. S. Loewinger, Copenhagen 1978.
- ⑧ The Pentateuch Codex Hileli, Early spanish Manuscript from the

一つの謎である。

- ①⑦ Paul Kahle, Masoreten des Westens II (Stuttgart: Verlag von W. Kohlhammer, 1930), pp.62*–63* (第3の伝統として紹介されているのはモーシェ・モへの **שִׁשְׁבַּר**), Lazar Lipschütz, Ben Ašer-Ben Naftali Der Bibeltext der tiberischen Masoreten. Eine Abhandlung des Mischael ben 'Uzziel, veröffentlicht und untersucht (Bonn, 1935) p. 1 参照。

尚 **שִׁשְׁבַר** は BHK 創30,18のアパルトが言うように **אִישׁ שִׁבַר** と理解されよう。但しこのアパルトの問題点については Ginsburg, Introduction p. XL III に於るオーリンスキーの言及を参照。

- ①⑧ Lazar Lipschütz, Kitāb Al-Khilaf, The Book of the Hillufim Mischael ben Uzziel's Treatise on the Differences Between Ben Ascher and Ben Naftali, Textus IV(1964), p.16 note 4.

- ①⑨ これらの呼称については拙論「BHS—その本文の性格と問題点」5頁を参照

- ②⑩ A. Harkavy und H. L. Strack, Catalog der Hebräischen Bibelhandschriften der Kaiserlichen Öffentlichen Bibliothek in St. Petersburg (St. Petersburg, 1875), p.92(No. 68), p.104(No.80).

- ②⑪ ちなみに **ש** のダーゲシュの付し方は C, A, H では **שׁ** なら **שׂ**, **ש׃** なら **שׁ** である。L は **שׁ** であつたり **שׂ** であつたりと統一されていない。K, S は印刷上の都合から **שׁ**, **שׂ** といずれも右空間にダーゲシュ。

- ②⑫ 省略書法 (以下, 省略形), 完全書法 (以下, 完全形) は妥当な表現ではないが他に良い表現が見当らない。L の大マソラ (レビ27,15) によれば **שׁ**~ と完全書法の3ヶ所は創47,24. レビ27,15. ネヘ6,5. ウァイルのマソラ・ゲドラでは No.828. 一般的に省略形で書かれる語が完全形で書かれるべき時に **מל** (完全形) と, 一般的に完全形で記される語が省略形で記されるべき時に **מל** (省略形) とマソラ学者は小マソラを付した。名詞, 動詞の語根にまで触れた詳しい論議をマソラ学の祖, エリア・

レビタ (**אליהו הלוי**) が展開している。(C. D. Ginsburg, The Massoreth Ha-Massoreth of Elias Levita (英訳, 1867), pp.119–120, 144–179) レビタの出した **מסרת המסורת ספר** のひとつは西独ゲッティンゲン市のニーダーザクセン州大学図書館にある。その内容はバツハーによって実に的確にとらえられている。W. Bacher, Elija Levita's wissenschaftliche Leistungen. Zeitschrift der Deutschen-und Morgenlandischen Gesellschaft 43(1889), pp.206–272. 完全形, 省略形については p.233 でよくまとめられている。

- ②⑬ **הפרים. לית וחסר ואין והויד בלא דנש**. ミヌハト・シャイはヘブル語印刷聖書 **גדולות מקראות** に印刷されており, 我々はそれを旧約各書の終りに見出す。16世紀後半に旧約本文研究史上に金字塔を打ち建てたのはメナヘム・デ・ロンザノとヤエディドゥヤ・ソロモン・ノルチである。前者は五書のマソラコメンター, オール・トーラー (**אור תורה**) を1618年に公けにし, 後者は全旧約聖書のマソラコメンター, ミヌハト・シャイ (**מנחת שי**) を1626年に完結した。

- ②⑭ これも又永遠のケレーに属する語の一つである。ある程度, と言ったのは, ハーテフ・パタとシェワの変換の問題が残るからである。ゴードンによれば, もし **אֲרִנִי** の母音をそのままとり **יְהוָה** とすれば, 読者は最初の音節を単純に Ya-と発音し, その結果本来意図していないヤーウェ (Yahwe) と読ませる危険がある為, これを避けるべくマソラ学者がシェワを付した, という事になる。尚彼によれば, エホバなる読み方はケレーとケティーブの混合の産物である。Cyrus H. Gordon, "The pointing of **יְהוָה**." Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft 56 (Neue Folge 15,1938), p.174.

- ②⑮ Geiger, Urschrift, p.262. Rudolf Meyer, Hebräische Grammatik, Bd. I (Berlin: Walter de Gruyter, 1966), p.81

שְׁמַי はヘブル語では **שָׁמַי** であり, これは **שׁ** という省略形でユダヤ教文献に数多く現われる。神名を聖なるものと恐れかしこむあまり15世紀

の印刷聖書には יהוה のかわりに יְהוָה, אלהים のかわりに אֱלֹהִים と印刷したものもある (Ginsburg, Introduction p.812, 869)。尚ユダヤ教文献には אלקים (エローキーム) なる形もしばしば登場する。

- ②6 Gesenius-Kautzsch, Hebräische Grammatik § 102m.
- ②7 拙論「BHS—その本文の性格と問題点」14—17頁参照。
- ②8 ヘブル語全文は H. Graetz “Eine masoretisch-grammatische Kleinigkeit bezüglich der Silbe הֶל”, Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judenthums 21 (1872), p.9 に引照されている。
- ②9 Ibid., p.10. (メギラ II p.71C)
- ③0 Ibid, p.8. 15.
- ③1 これらの諸学派については, 拙論「BHS—その本文の性格と問題点」6頁を参照。
- ③2 Joh. Bern. De Rossi, *Variae Lectiones Veteris Testamenti Librorum* Vol. II (Amsterdam: Philo Press, 1969), pp.96—106. Franz Delitzsch, *Complutensische Varianten zu dem alttestamentlichen Texte* (Leipzig: Druck von Alexander Edelmann, 1878), pp.7—9.
- ③3 C. D. Ginsburg “The Massoreth Ha-Massoreth of Elias Levita” (1867), p.160 (レビタの原書では47頁)。ケティープは子音だけをさし, 母音, ダーゲシュはケティープに属さない。
- ③4 Lの巻末マソラには全旧約聖書のパセクの一覧表がある。そこにサム上7, 10はないのがその理由。しかし Ginsburg, *The Massorah vol I-2* (London 1883) ט - § 200 にはある。
- ③5 הדלית רפה לקריאת ביא ולבני ברנש
- ③6 Frensdorf, *Das Buch Ochlah W'Ochlah*, No.130.
- ③7 cf. “Perhaps the K (=ケティープ) is an abstract noun like כְּלוּלוֹת (see Ges. K. p.385) meaning: “open battle”, as opposed to guerilla warfare. T (=タルグーム) may be expressing the plural form in the K by his rendering עבדי קרבא מתבררין ” R.

Gordis, *The Biblical Text in the Making* (New York: KTAV Publishing House, 1971), note 339.

- ③8 拙論「BHS—その本文の性格と問題点」10頁参照。
- ③9 נכתב בוא"ו עם הדגש ובלולים とノルチも注目。
- ④0 するとブーバーのように Erztruchsess (大内膳正) との訳も可能になる。
- ④1 Israel Yeivin, “The new edition of the Biblia Hebraica-Its Text and Massorah” *Textus VII* (Jerusalem, 1969) pp.114—123. Sの方法論的問題点をこの論文はよくまとめている。
- ④2 G. E. Weil, *Massorah Gedolah iuxta codicem Leningradensem B19^a* (Roma-Stuttgart, 1971) No.484.
- ④3 “מְנַבְּרָתָם Gimel per anomaliam absque Dagesch, testibus Abuwalido in Harikma 166 et Kimchio in comm.et Michlol 46^b” (S. Baer, *Liber Ezechielis* (Lipsiae, 1884) p.97) ベアはギンスブルク,そして後には殊に激しくカーレによって批判された。しかしベアが近代本文学に対して果した貢献は大きい。彼は詳細な脚注付きのペブル語聖書を旧約全書にわたって公けにした。
- ④4 Weil, *Massorah Gedolah*, No.1640.
- ④5 Kの誤った省略形の読みがSに引き継がれている。それがワイルの判断を狂わせ, 彼は *Massorah Gedolah* No.3978 でオバ21の読みを משעים と誤って修正した。くわしくは省略するが, この誤りはSの読みによってだけではなく, Lの大マソラ (ネへ9, 27) 自体が内容的に充分明らかでない事によっても誘発されている。
- ④6 הקהתי הקריף בשוי"א לברו בס"ס
- ④7 Gesenius-Kautzsch, *Hebräische Grammatik* § 20m, § 49c 参照。
- ④8 אחוך במקצת ספרים הוא"ו ברנש ובס"ס בלא דגש
- ④9 אַחֲוָה שָׁמַע לִי וּנְפַל מִמֶּנּוּ הַדָּגֶשׁ Jo. H. R. Biesenthal et F. Lebrecht ed., *Rabbi Davids Kimchi Radicum Liber sive Hebraeum Bibliolum*

Lexicon cum Animadversionibus Eliae Levitae (Berolini, 1847), p.97.

- ⑤⑩ 創32,5. ホセ9,15。
- ⑤⑪ ヒッルーフィーム (חִלּוּפִים, 以後Hと略す) については拙論「BHS—その本文の性格と問題点」, pp.4-6参照。本論文ではL, BにあるHの他, ボードライアン図書館ヘブル語写本カタログ No.11, No.93, No.179 (Bodl. 11, Bodl. 93, Bodl. 179)と大英図書館のアルンデル・オリエンタル16 (Arund. Oriental 16), オリエンタル4227 (Oriental 4227) 等のHを主に用いた。
- ⑤⑫ 判断は注51の各Hによるがそれらが内容的に必ずしも一致しない場合もある。以下注⑤⑬と⑤⑭を参照。
- ⑤⑬ Bodl. 11のHによる。
לָמַע לְצוּלָה חָרָם וְנִהְרַחֵךְ חָסֵם, לָמַד וְנִהְרַחֵךְ מֵלָּ Ar. Or. 16, B等も持っている。LのHは全く反対の内容を持ち完全形の וְנִהְרַחֵךְ は西方の, וְנִהְלַחֵךְ は東方の読みとなるがこれではCの修正の説明がむづかしい。
- ⑤⑭ חָסֵם と מִשְׁפָּט の間隔が異常に大きい。
- ⑤⑮ Bにも וְנִכְאֹו → וְנִכְאֹו と印刷聖書には珍しい修正が見える。
- ⑤⑯ 各Hで混乱が見られ21,9か21,19か, あるいは25,24かはっきりしない。
LのHは,
לָמַע טוֹב שַׁבַּת מִדְּוֹנִים כָּת, לָמַד מִדְּוִינִים כָּת וְקָ
Bodl. 11 と Bodl. 179 のHは,
לָמַע טוֹב לְשַׁבַּת וּמִדְּוִינִים, לָמַד וּמִדְּוִינִים כָּתִי וְקָ
Bodl. 93, Or. 4227, BのHは,
לָמַע טוֹב שַׁבַּת וּמִדְּוִינִים כָּת, לָמַד וּמִדְּוִינִים כָּת וְקָרִי
- ⑤⑰ LとBodl. 179のHによる。Bodl. 11, 93, Or. 4227そしてBのHによれば東。
- ⑤⑱ 拙論「BHS—その本文の性格と問題点」 4頁で紹介したLのコロフォ
ン参照。
(日本イエス・キリスト教団新座教会牧師)